

# 史遊会通信

No. 218  
平成 25 年  
3月 16 日 行  
発

事務局  
(03)  
3712-0651  
下山田方

例会のお知らせ

◎ 3月例会

日時 平成 25 年 3月 27 日 (水)  
午後 6 時～8 時

二月講演要旨

## 軽野・軽部 地名考

柴田弘武

諸問題

自由執筆者 瀧澤中・柴田弘武

中山喬央の諸氏

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 新井宏氏

テーマ 考古学における新年代論の

◎ 4月例会

日時 平成 25 年 4月 24 日 (水)

午後 6 時～8 時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 中込勝則氏

テーマ 未定

自由執筆者 太田精一・森下征二・  
佐藤健一の諸氏

締切 4月末日

『常陸國風土記』香島郡条に、「軽野から東の大海上の浜辺に、流れ着いた大船があつて、その長さは十五丈、内の幅は一丈余りである。朽ち碎かれて砂に埋もれ、今もなお残っている。淡海の世(天智朝)に、国土を探し求めにつかわそうとして、陸奥の国の石城の船大工に大船を作らせたところ、ここまで来て岸に着き、ただちに壊れたという。」とある。茂在寅男はこの話や仁徳記や、応神紀の伊豆国(の)船名「枯野」(軽野神社の存在を傍証する)、垂仁記の「軽の池」等の説話を挙げ、軽野・枯野はカノーと読み、東南アジアの船「カヌー」と同系の語であろうとし、軽野・枯野・刈野などの地名は造船または船材伐り

る。若松浜で採れる砂鉄は「剣を造るのにたいへん良い」と明記されている。鹿島神宮周辺には古代製鉄跡が発掘されている。

② 下總国海上郡輕部郷（千葉県香取郡東庄町）

鈴木健はカルベは「刀作りの部」であったとする。当地の羽計扶喰（はばかりふじき）古墳（七世紀頃か）から副葬の鉄塊地金や鐵刀・鐵鎌が出土しており、長谷川熊彦は『わが國古代製鉄と日本刀』で「おそらくこの周辺の野タタラで精錬され、被葬者に獻じられたものが副葬され、鉄刀、鎌等はこの地金を用いて造られたものであろう」と書いている。伊東正一は「ハバカリ」は紀の大葉苅（大きな刃の刀）ではないかという。

東庄町小座には風王神社（祭神シナツヒコ・ヒメ）があり、周囲には「かなくそ」「たたら」などおびただしい金工関連地名（小字）がある。

③ 下野国河内郡輕部郷（栃木県日光市今市周辺）

猪倉に鍛冶内の小字があり、『角川地名大辞典』には「あるいは鍛造にちなんだ地名かとも考えられる」とある。その他梶ヶ原、金山蔭、穴沢などの地名もあるし、猪倉の琴平

神社の祭神が金山彦である」とも注目される。また人丸神社も二社あるが、「ヒトマロ」は「一丸」で「一眼」を意味し、鍛冶祖天目一箇神を表すという大和岩雄説もある。当地周辺には小白鉱山・瀧頭鉱山・豊岡鉱山がある。

④ 近江国愛智郡蚊野郷（滋賀県愛荘町）

軽野我孫公の拠地とされ、軽野・蚊野・安孫子の大字があり、式内軽野神社もある。軽野の正境には製鉄遺跡があり、金堀塚の地名も二ヶ所ある。我孫子神社の祭神天雅彦命は新羅王子の天日槍だという伝承もある。

⑤ 大和国高市郡輕里（奈良県橿原大軽）

谷川健一は『青銅の神の足跡』で、「軽の地や牟佐（橿原市見瀬）などは、かつての製鉄の場所であった」と書き、また『鍛冶屋の母』では金関丈夫が「軽部の畑からカナクソが出る」と農夫から聞いたという話も紹介している。李寧熙も飛鳥川流域は産鉄地であったと力説している。なお近くには我孫子・アビコの小字もある。

⑥ 和泉国和泉郡輕部郷（大阪府忠岡町・和泉町・泉大津市）

泉大津市我孫子は古くは穴師村であった。穴師は「鉄穴師」の略であり、『日本靈異記』の痛脚村である。「痛脚」と書いて「あ

なし」と読ませることでも分かるように鉄穴師（番子）が足を痛め易いことからきた用字である。式内泉穴師神社の祭神は天富貴大神と佐古麻植大神であり両神名とも「鉄吹き」「鍛冶」を驕っている。

⑦ 但馬国養父郡輕部郷（兵庫県養父市）

広谷と上箇（あげ）に軽部神社がある。養父市場には養父神社があるが、その境内社に加連屋神社がある。「加連屋」は「鍛冶屋」であろう。近くに鉄屋米地の地名があり、産鉄地であることを示す。養父郡には鳥取氏の祖神である天湯河板革命を祀る和奈美神社が五十四社もあるが、鳥取氏が産鉄族であったことは山本昭の『謎の氏族 鳥取氏』で明らかである。

⑧ 備前国赤坂郡輕部郷（岡山県赤磐市）

赤坂町に東軽部・西軽部が残る。隣接して刈田・大刈田があり、ここは鳥取郷とされる。山本氏は前記著書において当地域も産鉄地であることを力説している。周辺に金久層など多くの金工関連地名がある。

⑨ 備中國窪屋郡輕部郷（岡山県總社市）

清音に軽部の地名が残り、軽部神社がある。周辺に鐘鑄場、鑄物師などの地名が多くある。黒田には小野小町伝説（小野氏は産鉄族）が

あり、黒田の南の青江は古来青江鍛冶で有名である。

⑩ 伊豆国田方郡狩野郷（静岡県伊豆市）

天城湯ヶ島町本柿木に軽野の小字が残り、松ヶ瀬に式内軽野神社がある。茂在寅男が「枯野」の船材伐り出しの地と想定した所であるが、沢史生は「カノウ」は「鉄穴（かん）な→かのう）」に因るとする。有名な持越鉱山（金山）や深沢生金山があり、金山・金沢・横金など「金」の付く地名が多くあり、鉱産地であることは疑いない。

⑪ 加賀国能美郡輕海郷（石川県小松市）

軽海町の地名が残る。小字に鍛冶地名が三ヶ所、対岸の遊泉寺にも金山谷・鍛冶屋・梶谷・田金田などの地名がある。

⑫ 常陸国茨城郡安鶴郷（茨城県かすみがうら市）

古郷ではないがここに上軽部・下軽部の地名がある。周辺には小津製鉄遺跡、北接する石岡市井関に月の台製鉄遺跡、金子沢製鉄遺跡、柏崎地区からも製鉄遺跡が出土している。

結語 軽野・軽部の古地名は産鉄地を示すと言えるのではないか。

自由執筆

清正をめぐる数奇な人々

新井 宏

私も同人となつて『まんじ』九一号（平成十六年二月）に「文禄の役の狭間で」と題して、加藤清正をめぐる三人の数奇な人々について書いたことがある。

ひとり目は、司馬遼太郎が「韓のくに紀行」で紹介し、日本でも良く知られるように

舞伎通くらいしか知らない名前であるが、韓国では、愛国の烈女として有名な朱論介が、晋州城陥落後の酒宴で、彼を抱かかえたまま南江に身を投じ殉節したことで有名である。本名は木田孫兵衛という加藤清正の参謀長格の武将との説があるが、史実とは齟齬がある。

もうひとりが「日遙上人」である。晋州城が陥落し、論介が殉節して果てる頃、加藤清正は捕虜の中に漢字を書く十三歳の子供がいるとの報告を受けた。早速その少年「余大男」をつれてくるように命令する。

幼い時から文字を学んでいた余大男は、刃の前でも恐れる」となく、「独上寒山石経斜、白雲生處有人家」と書いて読上げた。唐末の詩人杜牧の「山行詩」をもじつたものであつた。これに感心した清正は、余大男を日本に連れ帰り日蓮宗の僧侶に育てる。

熱心な法華經信者であった清正は、自領の各地に妙法蓮華經の文字を入れた五ヶ寺を建立しているが、京都本圀寺に学んだ余大男は、その中でも最大の熊本本妙寺に戻り日遙と名のる。そして清正が亡くなつた翌年には二十八歳の若さで本妙寺三世の法灯を継いで、清正の菩提を弔うことになる。

日遙は高麗日遙上人と呼ばれ、朝鮮から拉致された人物として知られていたが、余大男と判つたのは最近のことである。遺品の中に故国の父から来た二通の手紙とその返書の下書きが見つかり、韓国側の記録とも一致したからである。珍しいことである。

ついでながら、三人に共通して「晋州」が出てくるが、ここは私が通つて立った國立慶尚大学のある地である。

さて、「まんじ」に清正を巡る数奇な人々を書いた時はここまでであった。

しかし、その時には、もうひとり書きたい人物がいた。李朝第十四代宣祖の孫で人質として日本に送られ、清正によつて日蓮宗の高僧に育てられた「日延上人」である。

しかし、そのストーリーがあまりにも高麗日遙上人と似ていて、王族出身ということにも疑念があつたので止めてしまつた。

ところが、最近になつて、韓國圓光大の梁銀容教授が、圓光大新聞に日延上人が宣祖の長男臨海君の子であるとする記事を載せてゐるのを知つた。大学教授が書いたからと見て正しいことにはならないが本稿で紹介して見る気になつた。

臨海君は、第十四代宣祖の庶出の長男であつたが、懿仁王后に子が無かつたので、王位繼承の第一候補であつた。しかし、乱暴で激しやすい性格のため人望がなく、文禄の役が勃発すると、後継者を決める必要があり、同腹の次男光海君が王世子となる。そのこともあって、臨海君は家族や宣祖の第六男の順和君らと共に、戦禍を避けるためと、募兵のため咸鏡道に派遣される。

ところが、一行が会寧に到着した時、鞠景人などの反乱者により囚われ、加藤清正に引き渡されてしまう。

清正が二王子に礼を尽くして処遇したことには、両王子の感謝状や礼曹司から秀吉宛ての手紙で知られているが、「慈悲は仏のごとく」とか「眞の仁人」とあり、そこには社交辞令を越えるものがある。もちろん、清正には、後に臨海君を政治的に利用しようとする思惑があつたに違いないが……。

その後、講和交渉によつて、二王子は釈放されるが、その際に臨海君の六歳の娘と四歳の息子は、人質として日本に送られてしまふ。そこには、臨海君が王世子でないことがら、李朝と何らかの「黙契」があつたらしからである。

しかし、講和は結局まとまらず、光海君を世子と定めた朝鮮王朝は、臨海君の子供の送還努力をしなかつた。そのため、清正の庇護を受けた臨海君の息子は十三歳になつた時、福岡の修昌山法性寺に入る。

宣祖の孫と言う身分もあつたかも知れないが、成績が優れていたようで、十六歳になつた時に京都の本圀寺へ向う。前出の余大男と同じ学問寺である。

ちょうどその頃、四溟大師の惟政が戦争捕虜送還の任務を帯びて日本にやつて来るが、宣祖の孫は、仏門に帰依していく忘れられた人物になつていて、十九歳になつて千葉県の飯高林に進み、教学や修行において実力を認められ日延を名乗る。その頃、宣祖が亡くなり、光海君が即位するが、長子相続の原則を主張する宗主國の明の干渉を警戒するあまり、臨海君は流され、密かに殺害されてしまう。

その後、日延は二十六歳の若さで日蓮の生まれた小湊の誕生寺で、可觀院日延上人となり、第十八代貫主を受け継ぐ。王孫などという経験ではなく、彼の学問的な実力が認められたからであろう。

ところが、一六三〇年に起きた日蓮宗の身

延派と本門寺派の宗教論争のあおりで、論争に参加しなかつた日延上人も連座して島流しにあつてしまふ。その時、日延上人はすでに四十三歳の不惑で円熟した人物になつてゐた。

島流しという形式ではあつたが、育つた福岡への帰郷であつたので、地元で熱烈な歓迎と帰依を受ける。黒田藩は彼のために、長光山香正寺を建て、藩主の友人として遇し、藩主との囲碁の対局のため登城しやすいように、

香正寺と福岡城下の間に流れる小川に橋を架けさせた。それが現在「上人橋」と言われてゐる。日延上人は七十二歳で亡くなる。

なお、日延上人は誕生寺貫主であつた頃、港区白金に最正山覺林寺を開き、清正の像を安置して江戸の墓所を営む。また、二歳年上の姉は黒田藩幕下の庭瀬藩主戸川肥後守の室となり、子々孫々世田谷の日蓮宗玄照寺の外護にあつたと言う。

「私たちには皆、浦上の者です。浦上では、ほとんど全部の人が私たちと同じ心を持つています」

と言つて

「サンタマリア ノ ゴゾウハ ドコ」

と言つた。神父は「なんとこの人たちはサンタマリア」と言つてゐるではないかと驚き、ローマで探しに探していた日本人キリストの子孫に会えた喜びで体が痺れた。

日本人の一団の

「本当にサンタマリア様だよ！ ご覧よ、ほれ、御子ジエズス様を御腕に抱いていらっしゃる」

の言葉を耳にして、キリストの子孫であることを確信し、ローマに「信徒発見」の連絡をした。

ここで非常に不思議に思うのは、一六一二年（慶長十七年）に家康がキリスト教禁令を

出してから家光の時代の嵐のようなキリスト弾圧の中、宣教師は一人もいない中で二百年間、よくぞ口のみの伝承（書き物は家探しでばれるから一切残さない）でここまで

キリスト教禁制の中で、天主堂に向かう華麗な異国人の行列をカクレキリスト達はどう

「ワタシノムネ、アナタノムネ ト オナジ」

正確に伝えられたものと驚きを禁じ得ない。

一六六〇年（万治二年）、パステイアン神

父が殉教したときに残していった予言

「七代経てば、丸に や の字の帆を立てて、  
バードレ様がやつてくる」

の言い伝えも、大浦天主堂に行つたキリシ  
タン達には残つていた。待ち焦がれてもいた。

今、キリシタンの日本殉教史を紐解くと、  
キリシタンであつただけで軽くて島流し、殆  
どが死の極刑となつてゐる。

キリシタンでないことの証明としての寺請  
制度、キリシタンが以前発生した集落では、  
それに加えて幼児は別として全村民が年に一  
度の「踏み絵」でのキリシタンではないこと  
の証しを強制されていた。

私は、キリシタン初代は自分がキリシタンになつたことで極刑を受けることを覚悟したと  
しても、二百五十年経ても初代が知つたキリ  
シタン信仰がその通り受け継がれたこと自体  
が本当に不思議に思う。

明治六年日本でのキリスト教解禁時、公に  
なつた長崎地方での祈りの言葉は、口承の繼  
続で集落毎に大幅に異なつてゐた。

しかし、信仰の指導者である宣教師がいな  
い条件の中で集落ぐるみの非常に強いつなが  
りと、キリシタン宗教暦の隠れた守り等によ  
つて、信仰の基本が二百五十年続いてきたこ  
とは世界史的奇跡と言えるのではないか。

が話題にのぼつたりしたとき、その人の名が  
出てこないで戸惑うとそこでぶつりと途切れ  
てしまつてばつの悪い思いをしなければなら  
ない。

また、街中で偶然以前面識のあつた人と出  
会つたときなど、その人の名を記憶していく  
呼び掛けると相手は名を呼ばれたことで親し  
みをおぼえて相好を崩し、たちまち空白期間  
が埋まつて旧交をあたためることができる。

私は知人の名を記憶しておかねばならない  
必要に迫られて努力をし、試行錯誤を繰り返  
した。

そして、ついに記憶する要領を編み出した。

私は、小学生のころから日本史に興味を抱  
いていたので、歴史上の人物の名をよく覚え  
ていた。

そこで、会つた人に歴史上の人物の名を被  
せて記憶することにしたのだ。

たとえば、石田さんという人に会つたら、

「あの人人が石田三成だ」

武田さんという人に会つたら、

「あの人人が武田信玄だ」

今川さんという人に会つたら、

「あの人人が今川義元だ」

そう自分自身に暗示をかける。

自由執筆

こんなはずではなかつた

千坂 精一

この「ころ記憶力の低下」が気になつてゐる。  
むかし、会社勤めをしていたころは取引関  
係の人たちの名をよく覚えていたので、  
「記憶力がいい」

と一目置かれていた。

といつても、私は特に記憶能力が発達して  
いたわけではない。担当する部署が複数あつ  
て守備範囲が広かつたので、当然ながら仕事  
の上で接触する人たちの数が多く、その人た  
ちの氏名をいちいち覚えておかなければなら  
ない必要に迫られていたのだ。

取引先を訪問するときはあらかじめ名刺帳  
を繰つて相手の氏名を確認しておけばこと足  
りるのだが、面談中に突然共通の知人の消息

私は、石田三成にも、武田信玄にも、今川義元にも会ったことがない。だから、石田さんの風貌を石田三成、武田さんの風体を武田信玄、今川さんの容貌を今川義元だと思い込んで眼に焼き付けておけばいいのである。

こうした努力の甲斐があつて、知り合つた人々の姓を覚え込むことができた。  
天性の素質ではなく、そんな努力をしていふことを知らぬ社内の人たちは私のことを、  
—すぐれた記憶力の持主。

と誤解して、畏敬の念をもつて接してくれていたのである。

その抜群と思い込まれていた記憶能力がこのごろすこし怪しくなってきた。

疲れが目立つてきたのだ。

これまでには、年上の人と雑談していくその人が地名や人名、演劇、映画、話芸の表題や演者などが思い出せないときに助け舟を出して話を先に進めていたのであるが、このごろはこちらも同様に思い出せなくなってしまった

こんなことでは講演中に突然つかえて立往生してしまい、主催者に迷惑をかける事態にもなりかねないと思い、体調を理由に出講をいつさい辞退していまは自分の殻に閉じ籠もり、取材をしたり史料探しをしたりして気儘に書くことだけをたのしんでいる。(了)

### 自由執筆

#### 武則天の功罪 (II)

##### 中込 勝則

#### 5、中宗の襲位と廢位

高宗死後、皇太子の李顯が皇位につき中宗となつた。ところが、皇后となつた韋氏が武后の悪いところばかりをとつたような権力志向の強い女で、のちに唐朝に様々な問題を引き起こすがこれは本稿では触れない。彼女は自分の父親の韋玄貞を侍中という要職につけようとしたとき、これに中宗の補佐役の裴炎

が反対した。中宗は怒つて「私は皇帝だ。韋玄貞に天下を与えることもできるのだ」と口走つた。裴炎はこれでは中宗には皇帝たる資格がないと武后に訴えた。中宗は位にあること3か月で廢位され、弟の李旦が帝位に就き、睿宗となつた。睿宗は、兄の悲劇を見ているから、政治には全く無関心を装つて宮殿に引きこもつてばかりで、政治は全く武后まかせだつた。

#### 6、武后的政治的功績

こうして武后は独裁者の地位に就いたが、その功績は、①農業の振興、②科举制度の改

革による人材の登用、③婦人の地位の向上、④対外戦争をしなかつた、⑤文化の振興であろう。

①については、彼女が六七四年に高宗に提出した「十二の建言」の第一項に「農業と養蚕業に力を入れ、農民の労力と税を軽減すること」とし、農地の開拓と食糧増産は、その結果民を富ませることとなる。

そして水利灌漑事業・開墾事業・水路整備と食糧や物資運搬改善を行なつた。均田制の維持にも力を入れた。

高句麗平定以後は、大きな戦をしなかつたから徵兵による農民の負担も減り、農村は充

て話が中断したまま尻切れで終わつてしまい、別れたあと帰路の車中で突然思い出して口惜しい思いをすることがたびたび起つるようになつてきた。

実した。後に杜甫が、玄宗の「開元の治」の時代には、人が旅に出るのに食料を持参する必要もなく、道路には豺虎（盜賊）なく、旅に出る前に行路の吉凶を占う必要もなかつたと詠つたような、民の平和が実現する下地がつくられたのは武后時代であつた。

- ② 科挙は隨の文帝の時代に制度化され、門閥を排して有能な人材を皇帝のもとに登用するのを目的としたが、武后はこれを整備し、最終段階の試験に「殿試」といつて、皇帝が直々に試問する制度を定め、武后は高宗と並んでこれに臨んだ。彼女は人を見るところにおいては特別な慧眼を持ち、優秀な人間は、門地門閥にとらわれず登用したから、優秀な官僚群が育ち、彼女の時代に活躍したのは勿論、次に続く「開元の治」を支えた宰相たちは、この時代に登用された官僚群の中から出たのである。
- ③ 女性の地位は、中国古来の農業社会では男性より一段低いものとされていて、武后は、唐という遊牧民の系譜の風習たる男女平等という考え方を取り入れ、少なくとも建前的には、法律にこれを取り入れた。女は、旧来は一旦嫁ぐと娘家を離れられなかつたのを、協議離婚できるようにし、再婚

も可能とした。母への服喪期間も父親のそれと同じ三年に統一したり、宮廷内での女性の登用人数も多くする等、女性の地位を全般的に向上させた。

養蚕業という女性に適した生産がこの時代に大いに発展したのも、女性重視の副産物である。

#### ④

彼女は一面では文化学術を愛することにおいて大いに意を用いた。その代表が今も世界遺産として残る「龍門石窟」である。この石窟は洛陽郊外に北魏の時代から掘りつけられてきたが、武后時代に首都が実質的に

洛陽に移つてから、大いに発展をみた。今も奉先寺にのこる石の菩薩像は武后的顔に似せて掘られたという。

また、彼女は字に異常な関心を持ち、自ら書をよくし、鳥がとまつた独特の文字を書いて、「則天文字」を発明した。「則天文字」は、約十七字あつたといふ。「圈」という字はその名残りである。その他、仏教・學術は、国内が平和だったこの時代に大いに発展した。

(以下次号)

事務局だより

#### ※新会員の紹介

##### ▼漆原直子氏

住所 東京都足立区伊興四の十の十四  
電話 03・3857・6179

紹介者 新井宏氏  
興味あるテーマ 金属関連の歴史・金属民

俗学と地名学他  
今後の計画 家事と育児と仕事の目を盗んで、遺跡巡りをすること

題名 「考古学における新年代論の諸問題」  
歴博が炭素十四年代に基づき「弥生開始期五百五十年遡上論」を「新聞発表」してから十年になる。この間、考古学界では、多角的な総括（反論）が進んでいるが、肝心の炭素年代について、議論を主導しているのは私である。そのため、一月末に愛媛大と瀬戸内海考古学研究会に招かれ講演を行つた。

#### ※三月の講演趣旨

新井 宏

今回は、その内容をそのまま紹介する。  
※今年度が始まつたばかりで鬼が笑いそうですが、忘年会の日取りがきました。  
十二月十一日（水）学士会館です。